

論文要約

論文題目 ヒンドゥー寺院に生きる——南インド・チダンバラムの寺院司祭とその家族の民族誌

申請者 飯塚 真弓

論文要約

本論文は、南インドのチダンバラムでヒンドゥー寺院に奉仕するバラモン司祭と、彼らを支える家族の生活について、彼らのもとで申請者が行なった参与観察を通して描いた民族誌である。

序章では、ヒンドゥー教における浄性の体現者であり、禁欲僧を理想とする従来のバラモン研究について、主に次の3点から批判的に再考し、本論文の視座を示した。

第一に、従来のバラモン研究では、バラモン間の差異が検討されてこなかった。現世放棄を理想とするバラモン像のなかで、贈与や他者とのかわり合いを避けられない寺院司祭の地位は、その中でも低位に位置付けられてきた。本論文では、調査対象である寺院司祭らの他者に依存しない行動様式を明らかにすることで、現世放棄の理想とは異なるバラモン像やバラモン寺院司祭の地位について考察する。

第二に、従来の研究ではバラモン男性のみに焦点が当てられており、彼らを支える女性や親族の役割、婚姻関係、家庭祭祀の位置付けが曖昧であった。禁欲僧とは、女性の排除、現世を生きる人間の男性性や女性性の否定の上に成り立つ理想像である。本論文では、男女の相補関係や、寺院司祭の男性性や女性性にも着目し、寺院と家庭での実践の双方をあわせて分析する。

第三に、南インドのバラモンが置かれた社会的な位置付けである。南インドにおいて、バラモンは少数派であり、政治経済領域でも州政府と拮抗する関係にある。この特異な社会的な位置づけが、現代南インドのバラモン寺院司祭ディークシタルの生存戦略をいかに左右するのか、検討する余地がある。ヒンドゥー寺院とその寺院を司るバラモン寺院司祭の生は、地域の政治や政策とも複雑に絡み合い、交渉のなかに位置付けられ、彼らはその中で自らの立場や宗教的な伝統に向き合い、実践を変容させている。

本論文は以上の点について、申請者が南インドで寺院祭祀に従事するバラモン寺院司祭ディークシタルの間で行った参与観察調査にもとづき、明らかにするものである。

第1章では、調査地である南インド、タミル・ナードゥ州チダンバラムとそこに位置するナタラージャ寺院、調査対象である寺院司祭ディークシタル、当該地域の暦の特徴と年中祭祀の概要を示した。

以降、本論文は2部構成からなる。第2章から第5章を構成する第I部では、ディークシタルの家庭における規範と実践を描いた。

第2章では、寺院司祭が暮らす家屋の特徴を示し、居住空間における宗教実践とジェンダーについて分析した。居住空間は、彼らの生活実践の現場でもあり、同時に家庭の儀礼実践の舞台でもある。そこでは、浄・不浄をはじめとする宗教観念や親族・カーストの区分を生み出すような境界がいかに認識され、実践されているのか、間取りや動線、家屋内の空間構造や装飾による寺院司祭住居の特徴とその変容を示した。また、嫁と婚家の姉妹との微細なポリティクスのありようを台所の使い分けやお裾分けのやりとりなどの事例から示し、家屋内の人間関係や女性の役割について描写した。

第3章では、誕生から死にいたるディークシタルの人生儀礼の特徴について、特に彼らの社会的な位

置づけがいかにか構築されているのかを明らかにし、彼らの人生儀礼を支える女性親族の力に焦点を当てた。また、人生儀礼においても寺院での儀礼実践や家庭と寺院の往還が頻繁に行われることから、寺院との深いつながりが示されていることも明らかにした。

第4章では、カースト集団存続の要である婚姻規範と実践について、親族名称、親族組織、婚姻規則、実際の縁組、儀礼実践をとりあげて分析した。ナタラージャ寺院では婚姻により司祭権が付与されるため、寺院司祭にとって妻の存在は重要である。婚姻儀礼の事例では男女の相補性や神格化が象徴的に示され、縁組の事例からは、ディークシタルを再生産するための複雑な親族関係と内婚システムが明らかになった。

第5章は、バラモンを取り巻く社会変化を受け、彼らの婚姻規則や規範から齟齬をきたしたり、逸脱したりしている、実際の婚姻や恋愛の事例や儀礼歌の分析を行なった。女性たちが家庭儀礼で歌う儀礼歌は、歌という形式で表現される規範であると同時にそこから微妙に外れる感情の表現でもあった。これらの事例について、バラモンとしての集団規範やディークシタルとしての集団規範のもとで葛藤する個人の個性に焦点を当てて描写した。

第II部は、タミル地域社会におけるヒンドゥー寺院や寺院司祭ディークシタルについて、寺院の祭祀や経済活動、政治とのかかわりから照射し、検討した。

第6章では、調査地であるチダンバラムのナタラージャ寺院と地域の寺院の年間祭祀を詳述し、地域社会における寺院と寺院司祭であるディークシタルの重要性和優位性を明らかにした。また、ナタラージャ寺院境内にある女神寺院での祭礼やチダンバラムの他の女神寺院の祭礼が、ディークシタルの家庭祭礼と連動し、男女の相補性を体現している点を明らかにした。

第7章では、寺院の経済活動に着目し、寺院を支える多様な贈与実践の現状を明らかにした。まずは、寺院の贈与制度とその仕組みについてまとめ、次に、寺院を支える多様な贈与実践のあり様を、具体的な贈与実践の事例から検討した。ナタラージャ寺院において信者からの宗教的贈与は、寺院の宗教活動や経営のみならず、司祭やその家族の生活を支える経済的基盤でもある。しかし、その贈与実践は司祭らの単なる経済的な価値や生存戦略に基づいてなされるものではない。有力カースト集団やバラモンによる組織的な寄進、インド国内外の個人による寄付を宗教的贈与や「フィランソロピー」として読み替える動きがみられ、これらが寺院司祭ディークシタルの尊厳を保持する営みとなっていることを明らかにした。

第8章では、タミル・ナードゥ州政府と寺院司祭の法廷抗争を事例に、地域主義とカースト政治が交錯する政治的アリーナとしてのヒンドゥー寺院とそこで葛藤する人々の実践を描いた。タミル地域主義やドラヴィダ民族主義とは異なる、サンスクリット語を基盤として汎インド的な「ヒンドゥー性」を掲げるマイノリティであるバラモンが、ローカルな政治空間を越境してグローバルな文脈やネットワークに訴えかけることで、いかに政治的な脆弱さを乗り越えようとしているのかを明らかにした。

終章では、本論文全体の議論を整理し、結論と意義、今後の課題についてまとめた。本論文は、南インドのバラモン寺院司祭ディークシタルが従事する儀礼や祭礼の詳細と、婚姻関係や家庭生活を含めた生活の営みについて丹念に描くことで、彼らがいかに脆弱な政治環境の中で自らのコミュニティを再生産しているのか、明らかにした。従来一枚岩的に描かれがちであったインドのバラモン・コミュニティの生活の磁場に降り立ち、ミクロな視点からその生成のメカニズムを明らかにした点が、本論文の意義である。特に、従来男性中心主義的に描かれがちであったバラモンについて、彼らの生活の場を支える女性の役割と男女の相補性、厳格なコミュニティの規範のなかで揺れ動く個人について焦点化することができ

た。さらに、バラモンを取り巻くグローバルな政治経済的な動向もふまえつつ、彼らがいかに社会変化に対応しているのかという点も照射した。

最後に、今後の課題として、第一に、個別の儀礼や事例の描写をさらに掘り下げることによってジェンダーの議論を深化させること、第二に、地域を超えたバラモンのネットワークや他のカースト・コミュニティとの関係性についてさらなる調査を重ね、現代におけるカースト／コミュニティ研究につなげていくこと、以上の二点を指摘した。